九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

あの頃

高木，市之助
愛知女子短大学長，日本大学教授

https://doi.org/10.15017/12363

出版情報：語文研究. 4/5, pp.8-11, 1956-10-30. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

あの頃

高木市之助

あの頃といっても私のあの頃は少々変っている。なにしろ渡り鳥よりももっと不規則に転々として来た、いや現にしている私の一生の事だから、小学校の幼な友達に、あの頃の××先生はまだ生きているだろうかとか、中学生時代の少年友達に、あの頃の××（旧友）もとうとう死んだそうだねなどという場合の「あの」はみんな、頃ばかりでなくところまでちがったあのである。そうしたさま〳〵のあの頃の中から、九州特に福岡を中心とするあの頃の思い出話をしょうというわけだが、私は何の因縁か一番多くの「あの頃」が九州につながっている。小学生の時分にもほんの二年足らず福岡に居たし、学校を出たてのほやほやの青年教師として熊本に数年いて、新婚の夢もまどかだったし、五十代の男ざかり？に福岡へ来て味わった銀婚の夢もまた古びはしたがまどかだったし、終戦後は日田の山中で一反二畝の美田を耕して保有米にありついたり女房を亡くしたりしたし、そして今日この衰残の身をもてあましながら時折は永年の御縁につながってはる〳〵と招かれ、飲みかつ語るひとりものの幸を満喫させられている。

そこで、九州のあの頃をもう少ししぼって国文学につながらしめよ。私が大学を卒業して後はじめて熊本の五高へ赴任したのは、いってみれば九州で国文学を講ずるかわきりだったが、本格的に大学の国文学を講じたのは九州ではやはり昭和十四年の四月から九大で国文学講座を担任したのが始まりで、昭和二十一年の三月に九大をやめたのが最後である。だから少し開き直って言えばこゝでいう「あの頃」は厳密にはこの期間であるべきであろうか。

昭和十四年のたしか四月を思い出すことはじつに楽しい。福岡に住むのは二度目であっても、九大に住むのははじめてだったし、大東亜戦が始まる前の福岡は物資が豊富で新鮮で、一区一銭五厘の電車に乗って、西新町の果てから箱崎のはずれの、あの迷彩によごれる前の白堊の法文学部へ通う途中、南側はお濠を隔てゝ城壁が続き、北側は横丁毎に博多湾の真青な海面がのぞくのも、あの狭い博多の

の繁華街の岩田屋や玉屋のまるで軒下みたいなところをくぐるようにかけ抜ける間の乗客の混雑も何か快適な思いがしたものだった。十四年といえば日支事変勃発後二年も経過していて日本は既に戦争に片足突込んでいた時代ではあったが、唯私にしてみれば、前任地の京城が内地とちがって、満洲へくり出す兵隊の通り路になっていて、京城駅頭は当時の軍歌そのまゝに「進軍ラッパきく度にまぶたに浮かぶ旗、波」に夜昼の別なく埋まっていて、私はその前年私のサンマレソートであった金剛山から京城への帰り路に燈火管制に逢った位で、朝鮮は内地よりも一足早く戦禍に巻き込まれた形であった。だからそうした世界から脱出？して来た福岡に私達一家は再び平和に帰ったような楽しさを満喫する事が出来たのであろう。

九大国文学の世帯は大体に京城に似たものであったが、それでも外地の派手な規模に比べるといくぶん小型に感ぜられた。京城では国語国文学が二講座で、教授は私の外に時枝さん、それに麻生さんが助教授と、綜合大学としてはまず賑やかな方だったが、九大へ来てみると、春日先生はその前年に御退職になり、新来の私の外には小島さん一人。故笹月清美さんは講義はされても、毎年更新の講師という甚だ不安定なもので、もちろん国語国文学は一講座というさみしいものだった。これは九大法文学部創設当時の美濃部構想がたゝっていて、美濃部初代学部長は在来の法学部が、あまりにも法律一点張りで思想的方面に手薄なのを是正し得るというところに法文学部という当時新らしかった学部の特色を目ざしたのだそうで、随ってこうした構想からすれば哲学ならぬ純文学例えば源氏や万葉などどうでもよかったのかも知れず、現に、第一回の長敬一郎さんによると、国文学を志して入学されたのに、春日先生はまだお見えにならず、まる〳〵一年間は国文学と名のつく講義が聞かれなかったというそみたいな話がある。これには初代の春日先生も随分お困りになったらしく、二代目を承った私は、せめて笹月さんを常任講師に直して、国語学の講義を常設しょうと努力したのだが、何分にも既に出来上っている定員を増すということは仲々容易でなく、それだけの事にたしか二三年はかかったとおぼえている。――などと固くるしい話を持ち出したのは、あの頃から仮令三十年も経ったにせよ、又中間に戦争の空白があったにせよ、とにかく今日の九大国文学が国語、国文学の二講座を擁して天下に聳えているのを見ると、あの頃の私には全く隔世の感があることを愚痴るか祝福するかしてみたかったまでで他意はない。そこであの頃の話を早速もとの柔かい随筆型にもどさなくてはならない。でもあの頃、春日先生が御引退後も儼として馬屋谷の一角に聳えていらっしゃっ

た事は心強い限りだった。そこで誠に申訳ない一くさりの挿話をさしはさむ事を特に先生にお許しを願わなくてはならないのだが、それは先生に御縁のない――という事はいってみれば酒の話という事のまたの名でしかないが――話になるからである。逆に言って小島さん笹月さんそれと私と、この三人は酒を愛することに於てこの不景気な国文学講座の中に一つの楽土を見出した。楽土の定例的な出現は何といってもお正月だ。年が明けると、大学の年賀のあとかなにかに、きまって三人は一二の助手か学生を引連れてこの三軒を飲みまわることになる。私はそこで聞いた笹月さんの博多子守唄の名調子を今も悲しく思い出す。又小島さんの即興狂言の持ち味がどんなにあのまるっこい上方弁と離れ難いものだかということをその度にしみ〴〵と感じた事も思い出す。しかし誠に相すまなく思い出す事はこの、酒くせだけは誠によかった一群の酔狂者が日頃の良心を麻痺させて、ところもあろうに春日先生の御宅へ夜陰にちん入に及ぶこと無きにしもあらなかったことである。これは決してこの上には御酒を頂戴する下心などあっての事ではなかった。たゞ先生のお宅で頂戴するお国独特のくるみの入ったお雑煮のおいしかった事は、あの頃の私にとっては文字通り一年一度の楽しい思出であった事を書きつける事を特に先生と和男さんにおゆるし頂きたい。

年に一度の学会の総会の事も私には忘れられない思出である。その頃は旅行もまだそんなに困難ではなかったので、この総会には、決して誇張なしに、全国から会員が集り、昼は研究発表により、夜は夜の歓を尽すことによって、心から久闊を叙したものだった。私が代々の会員と知りあい、そしてその事によって九大国文学の全容を認識し得たのは全くこの総会のおかげであって、私が今こうして〝あの頃〟などを書きたくなった少くとも一つの大きな契機は、謂わば歴代の九大国文学の人々をこの総会の思出によって、なつかしくまぶたに浮べる事が出来るという事に係る。

しかしながら九大国文学界のこうした楽しさもそんなに長くは続かなかった。いうまでもなく戦争が日一日、年一年と苛烈深刻になって行ったからで。あれほど豊富だった西新町かいわいの物資――たとえば軒並のかまぼこやの中何軒目がとくにうまいと同僚楠本さんに教わったりしたのもいつの間にか一軒又一軒と閉店されて行き、私の借家の庭の片隅にはおもちゃのような防空壕が掘られ、金切り声のメガホンがクーシューケーホーを連呼して町々を狂奔するようになった。「あの頃」もその頃になると九大国文学という学問の世界は半ば喪失、少くとも痴呆状態に陥って行った。そして何よりもいけなかった事は、九大国文学の肝腎の実質である若い学生や卒業生が片端から応召して

行った事である。

九大は戦ふ君があけくれのなにか明るき思出となれ

これはその頃の九大新聞に掲載された私のこうした若人達を送る歌である。

やがて応召からとり残された九大国文学も、その機能を奪われた、なぜなら一方に研究室の図書の疎開が始り、他方に軍の飛行場作りの為のモッコ運びの労働が始ったからである。私はトラックを待つ研究室の図書が二三十冊づつ荒縄でしばられて床の上にころがっている無惨な姿と、モッコかつぎの学生達の泥まみれの真剣な表情を忘れることは出来ない。といってもつい二三日前、私が名古屋から遙々と二日市へ国語の講習に招かれた帰りに、あの鋪装道路を疾走しながら右手に望まれる当時のモッコかつぎの古戦場を見はるかした思出は、さすがにぼやけて、そんなにどぎつくはなかったが、唯一つ私に今も胸痛く思い出される思出といえば、九大の国文学を原爆につなぐ東嗣君にかかわらずには居られない。東君は多分同窓の卒業生達が私よりもよく知っているように、一種の風格をもった変り者で、その国文学に対する情熱も一寸類がなく、考え方の中にも突飛といえば突飛だが、そこには何か或るきらめきのようなものがかくされていた。その彼が長崎の中学に勤めていて、あの原爆に出くわしたのだ。そして愛妻と生れたばかりの愛児とを瞬間に奪われたが、この怖ろしい不幸は決して彼を茫然として自失させはしなかった。数日の後彼はいかにも彼らしく、たった一人になったきびしい自由の故にもう一度大学院に入って勉強をしようとして、福岡の私に相談に来たのだが、更に十日程経って、再び私を訪ねた彼の用件は、もう大学院の入学についてではなく、急に頭髪が脱けはじめ、歯茎から血が吹き出す為の診断についてであった。そして翌日大学病院の病室を見舞った私に、彼は声がしわがれて物が言えなくなっており、その又翌日、再度見舞った私の前に彼は既に死亡室の一屍体でしかなかった。

越えて昭和二十一年三月三十一日私は九大の国文学から大分県の日田に去った。こゝに私の〝あの頃〟は否応なしに終らざるを得ない。もちろんその後も私はかなしく又楽しく九大とつながってはいる。あの頃の同僚笹月さんが三年前に、あんなにも若くして亡くなられて私達をたまらなく悲しませた事などは前者であり、現にこの稿を草している五日前にあの頃の学生で、今は少壮の高校先生なる諸君と、思出の美酒を、筑紫の平野の一角で飲み交した事などは後者であるが、それは幸か不幸か〝あの頃〟ずばりでなくて単にその後日譚でしかないことをいかんせん。

（一九五六・九・一）